

霊宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第113号

平成27年3月5日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736-56-2029
URL <http://www.reihokan.or.jp>

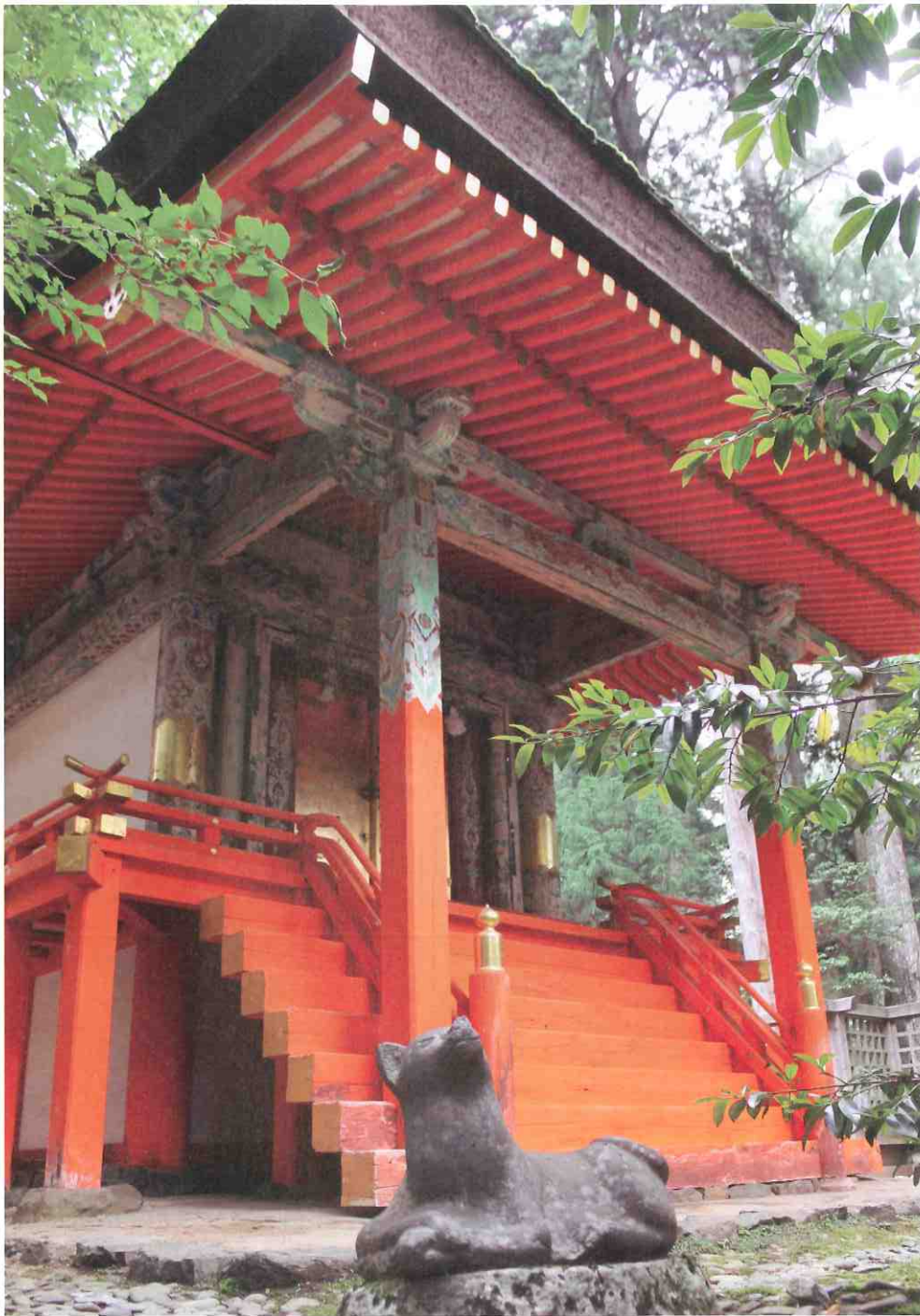
利用案内

開館時間

- 11月1日～4月30日
8時30分～17時00分
- 5月1日～10月31日
8時30分～17時30分
- 休館日 年末年始のみ
- 拝観料
大人 600円
高・大学生 350円
小・中学生 250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
- 専用駐車場あり

特別公開期間

- 4月2日～5月21日
開館時間を20時00分まで延長します。



奉納品は、高野山開創千二百年記念展「初公開！高野山の御神宝 壇上伽藍御社の奉納品」にて展示（3月21日(土)から7月5日(日)まで）
重文 山王院本殿のうち丹生明神社と、黒犬像

第113号 目次

冬期平常展のご案内	2
収蔵品の紹介87	3
高野山の古建築 第十七回	4
第9回もみじ祭フォトコンテスト	5
入選作品発表	6
高野山の文書(三)	8
高野山の考古学(五)	9
考古学から高野山の伽藍	10
「中門」を考える(その四)	11
高野山開創千二百年記念展	12
「初公開！高野山の御神宝」	13
開創法会期間限定特別公開	14
「高野山三天秘宝と快慶作孔雀明王像」	15
霊宝館の庭園	16

冬期平常展「密教の美術」

開催中

(3月15日(日)まで)

第9回もみじ祭
フォトコンテスト

「高野山の四季」

全応募作品展示中

(3月20日(金)まで)

毎月21日(弘法大師の日) ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

冬期平常展

「密教の美術」

期間 平成27年3月15日(日)まで



重文 板彫両界曼荼羅〈金剛界〉



重文 板彫両界曼荼羅〈胎藏界〉



三鈷杵 (花形鬼目)



重文 蝶形磬

主な出陳品

彫刻

重文 狛犬像 (獅子 (阿形) 狛犬 (吽形))

重文 板彫両界曼荼羅 (金剛界・胎藏界)

一字金輪坐像

天野社

金剛峯寺

金剛峯寺

絵画

重文 覚禅鈔

一字金輪曼荼羅図

尊勝曼荼羅図

普賢延命菩薩像

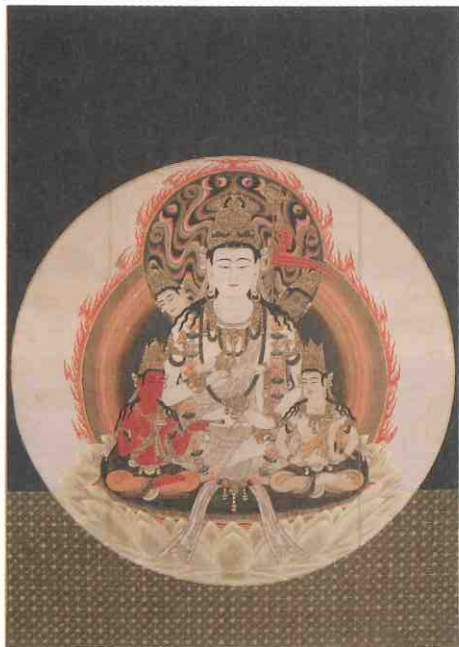
山内寺院

西南院

光明院

円通寺

恒例となりました平常展「密教の美術」を開催いたしております。弘法大師空海について中学生の歴史教科書を見てみますと、「平安時代の初めに中国に渡って密教を持ち帰った僧」といったような内容が簡単に紹介されています。当然、空海が持ち帰った「密教」がどのような教えだったのか、ということについては何も説明がなされていません。今回の平常展では、「密教」について、教科書の記述に続くような内容で見ていただくこととするものです。



五秘密像



国宝 金銀字一切経 大般涅槃経後分



両頭愛染明王像

工芸

重文 花鳥文磬
重文 蝶形磬

灌頂法具類
五鈷杵(伝行勝上人所持)
三鈷杵(花形鬼目)

書跡

国宝 金銀字一切経	大般涅槃経後分	金剛峯寺
国宝 金銀字一切経	修行本縁起	金剛峯寺
観音経	普門品第二十五	金剛峯寺
般若理趣経	(天野社一之宮伝来)	金剛峯寺

両界敷曼荼羅図(金剛界・胎藏界)

両頭愛染明王像	竜光院
星供曼荼羅図	成慶院
五秘密像	浄菩提院
大元帥明王像	竜光院
仏涅槃図	西南院
弘法大師像	竜光院
四社明神像	金剛峯寺
弥勒曼荼羅図	金剛峯寺
十大羅漢像	浄菩提院
愛染明王像	西南院
釈迦三尊十六羅漢像	浄菩提院
	竜光院

収蔵品の紹介 87

重要文化財 ^{こま いぬ ぞう} 狛犬像

二対のうち一对 鎌倉時代 (14世紀)

丹生都比売神社蔵

像高 阿形87.3cm 吽形91.4cm



神社ではおなじみの狛犬像が高野山にある、ということをも不思議に感じる方もいるかもしれませんが。現在、高野山霊宝館には二対の狛犬像が収蔵されており、以前は和歌山県かつらぎ町の丹生都比売神社（以下、天野社）にあったものです。天野社には現在、ほぼ同じ大きさの狛犬像が二対あり（うち一对は京都国立博物館寄託）、これら四対は作風に若干の違いはみられるものの、天野社にある阿形一躯（十五〜十六世紀の作）を除いてすべて同時期に制作されたと考えられています。力強い表現は鎌倉時代の作風を示し、天野社は嘉元三〜四年（一二三〇五〜六）にかけて社殿の造替が行われており、本像の造立時期をその頃とする説があります。天野社には、丹生明神・高野明神・巖島明神・氣比明神という四柱の神々が祀られ（併せて「四社明神」と呼ばれます）、これら四対の狛犬はそれぞれ四社明神の社殿を守護していたと思われます。社殿と狛犬の組み合わせははつきりしませんが、狛犬像が旧国宝（当時。現在は重要文化財）の指定を受けた翌月の

明治三十二年（一八九九）九月八日、台風によって天野社社殿のうち第三殿が全壊、第二・四殿も被害に遭い、第二・三殿の狛犬像二対もこの時に破損し、大正十二年（一九二二）に修理されています。当時の修理設計書によると、修理前は「無数の破片に粉砕形状をなさず」という状態だったそうです。霊宝館に狛犬像が収蔵されたのは大正十四年（一九二四）ですが、修理の際に黒漆塗古色仕上げの台座を新調しており、霊宝館の二対には台座が附属していることから、これらが修理された像だと考えられます。

なお、名称は「狛犬像」ですが、厳密には角のある方が狛犬で、角の無い方は獅子です。多くの場合で口を閉じた吽形に角があり（狛犬）、口を開いた阿形は角がありません（獅子）。神社で狛犬を見かけたなら角に注目してみてください。ちなみに壇上伽藍の御社では、弘法大師空海を高野山へと導いた白犬・黒犬像が、狛犬の代わりに社そばで座っています。

〔3月15日まで展示中〕

〔福形〕

連載

高野山の古建築

第十七回 県指定文化財 金剛峯寺山門

鳴海 祥博



山門の全景 正面の柱間の寸法は約6m。全国的にも屈指の大規模な「四脚門」で、本山の正門にふさわしい。



軒の見上げ 大きな材を豪快に組み上げて屋根を受ける。大きく湾曲した垂木はこの門独特の形状である。



棟木下中央の彫り物 二羽の鳥が大きく羽を広げ向かい合っている。右は鶴で千歳の長寿を表す。左は鳳凰で飛ぶ鳥の最高位を象徴する。



柱上の霊獣 龍の顔、猪の鼻、獅子の体、馬の蹄をしたこの姿は、一体何を表しているのだろうか。龍の子供「狻猊(さんげい)」という霊獣を想定してみた。

今回は総本山金剛峯寺の正面入り口「山門」を紹介しましょう。金剛峯寺へ参拝するとき、誰もが通る正門です。朝六時に開門、夕方五時にはピタリと閉ざされます。

昔、この門を通れるのは皇族や高僧、高野山内の要職にある僧侶だけで、多くのお坊さんや一般の参詣者は、右側のかご堀に明けられた「潜り門」や、境内東側の「会下門」しか通れなかったと言われています。

見上げるばかりの山門はその規模雄大、しかも随所に彫り物が施され、正に総本山の表門にふさわしい容姿です。

この門は「四脚門」という形式で、江戸時代の建築書には「高官の門」に用いると記されています。つまり高い地位であることを象徴する門の形式とされていたのです。

宝永三年(一七〇六)に描

かれた高野山の絵図には六百余りの坊院が描かれています。その中で門が描かれているのは僅か七カ所だけです。

それは当時の高野山での三大派閥の中心寺院(青巖寺、興山寺、大徳院)と密教教学の中心寺院(宝性院、無量寿院、勸学院、新別所)だけなのです。その中でもかつて「青巖寺」と称して一山を統率したこの本山の山門は、正面の柱間が約6mと飛び抜けて大きく、全国でも屈指の大きさです。

現代人から見ると、門は敷地を区切る出入口でしかないのですが、実は寺格を表す重要な指標だったのです。

総本山の山門は大きさだけではなく、そこにあしらわれた「彫り物」も目を引きます。扉の上には二匹の龍、その上には鳥がいます。鳳凰と鶴のようです。「龍鳳」は優れて貴い人を、鶴は千歳の長寿を象徴しています。

正面の柱の上には何やら不思議な動物の姿が彫り出されています。体には巻き毛が丸紋で表され獅子のようですが、足は馬の蹄です。顔は龍

のようにも見えますが猪のよな鼻が特徴的です。これは麒麟を表しているようにも思えますが、よく目にするピールのラベルの麒麟とは違うように思います。何れにせよ想像上の霊獣なので正解はないのかも知れませんが、敢えて「狻猊」という霊獣に見立てたいと思います。

狻猊は龍から生まれた九匹の子供の一つで、姿は獅子に似て獅子より勇猛な霊獣とされています。そして最も高い位の僧侶の座席を象徴するとされているのです。

「座主」という金剛峯寺の最高位の方の尊称を「狻猊」と称するのは、狻猊の座を占めるからです。狻猊は獅子と似ていることから獅子座とも言われるようになった、と物の本には解説されています。

不思議な姿の霊獣は「座主狻猊」のお住まいにふさわしい、そんな風にも思えてきます。この彫り物に籠められた寓意は何なのか、本当のところは分かりませんが、あれこれ思いを巡らせながら「彫り物」たちを見て歩くのも、高野参詣の楽しみの一つです。

第9回もみじ祭 フォトコンテスト入選作品発表

(受賞者敬称略)



グランプリ賞 森 和代

タイトル：「石楠花の頃」

21日の「お大師さんの日」には、毎月お参りさせて頂いていますが、その月ごとに温度も空気も変わり、四季折々の風情を見せてくれます。5月21日の日は、ちょうど石楠花が満開で小雨も降っていました。御廟橋をお渡りするお坊さま達は赤い傘を差し、おごそかで幻想的な雰囲気漂っていました。

第九回もみじ祭フォトコンテストは、「高野山の四季」というテーマで募集し、多数のご応募をいただきました。応募者の高野山に対する思いが伝わってくる迫力のある写真ばかりです。
その中から六作品が優秀作品として選ばれましたので、結果発表と併せてご紹介させていただきます。

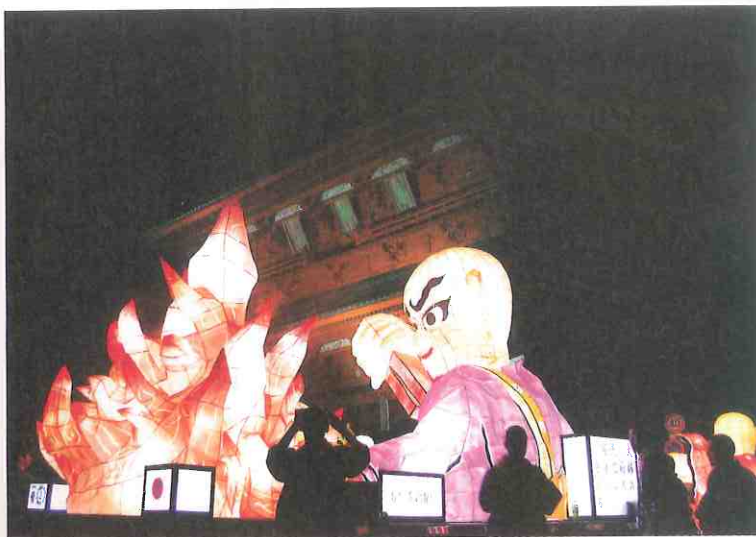
応募作品は、三月二十日(金)まで霊宝館で公開していますので、是非ご覧ください。
たくさんのご応募ありがとうございました。

(なお、フォトコンテストの開催は、今回で終了いたしますので、ご了承ください)

金賞 高橋 順二

タイトル：「大門とねぶた」

今年初めて奉燈祭に行ける事になり、まだ明るいうちから楽しみに待っていて、思っていたより大きいのと迫力におどろきながら色々と夢中になりながら撮影した一枚です。



銀賞 岩崎 幸夫

タイトル：「和み」

10月23日高野山参り時には、少々早いと思いましたが、写真に収める紅葉に巡り逢えたらいいな~と思いコンパクトカメラ持参で行きました。参道を奥之院に向かい歩いていると、平和橋の素晴らしい紅葉が目に入り外国人観光の人も日本人参りの人も「一つの輪」となり、お互い話をして、笑顔で楽しそうに、紅葉を見していました。雰囲気国際豊かな《和み》に感じシャッターを切りました。

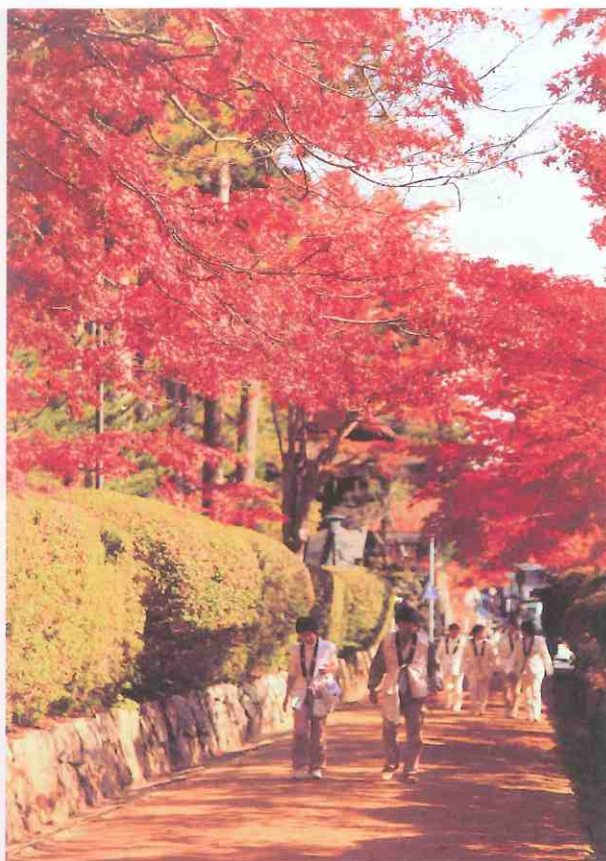
銅賞 木下 滋

5月の中旬、霧が静かに流れる荘厳な佇まいの金剛峯寺とシャクナゲ、思い通りの一枚を撮影することができました。



館長賞 小滝 基永

高野山の四季の中で一番きれいで一番、高野山らしい季節といえば、秋です。壇上伽藍の蛇腹道から東塔までの間が紅葉の季節で一番好きな場所です。もみじで赤く染まる中を四国お遍路さんの参拝風景を入れて紅葉を撮影してみました。高野山らしくて秋にしか出会わない風景、高野山開創1200年を迎える高野山、移り行く季節・風景、これからも高野山を撮り続けていきたいと思っています。

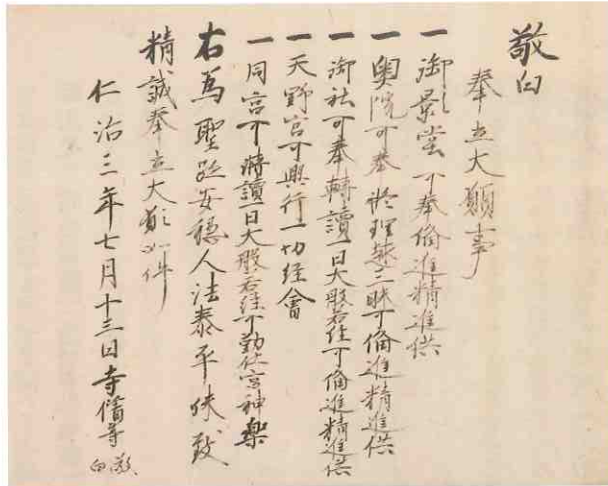


副館長賞 日下 義真

四季折々、様々な表情を見せる高野山では、美しい一瞬に出会うことができます。平成26年10月13日、台風19号が近畿に上陸した日、強い風に風鐸が鳴り響き、霧雨が横から吹きつける不安定な天候の中、雲間から差し込んだ陽射しが、根本大塔と金堂を繋ぐ架け橋を作りました。

高野山の文書 (三)

「高野山寺僧等立願文」と御社の大般若経転読



この史料は、「高野山寺僧等立願文」(国宝『続宝簡集』所収、金剛峯寺蔵)という、金剛峯寺僧が聖跡安穩(高野山の安泰)、人法泰平(衆生と教への安泰)のために五つの大願を立てた願文です。その内容は、①御影堂に精進供を進上すること、②奥之院で理趣三昧の法要を執り行い、精進供を進上すること、③御社で一日大般若経を転読し、精進供を進上すること、④天野(現かつらぎ町)の丹生都比売神社(以下、天野社)で一切経会を執り行うこと、⑤同社で大般若経を転読し、宮神楽を行うことです。

天野社一切経会の初見史料として知られる史料ですが、今回は、③の御社での大般若経転読について紹介します。

御社は、高野山伽藍の西端にあります。弘法大師空海が弘仁十年(八一九)、伽藍建立の際に丹生・高野両明神を勧請したといわれます。両明神は、高野山開創に深く関わっており、御社は高野山の鎮守社とされました。本殿の前には、拝殿の山王院があり、諸神事・法会は山王院で執り行われています。

大般若経とは、般若経典を集大成したもので、全部で六〇〇巻にもなります。このように膨大な大般若経を読誦することは大変であったため、転読という方法がしばしば用いられました。転読とは、長い經典の、初・中・終の要点または、題目と品名だけを略読して全巻を読誦したことに代える方法で、大般若経の転読は広く行われています。また、この願文の「一日大般若経」は、一日で大般若経を読誦することです。

最近の研究によると、大般若経転

読の主要な目的は、(1) 国家安泰・五穀豊穰等を祈るため、(2) 天災異変等が起こった際の除災の祈祷のため、(3) 追善・算賀のため、(4) 異国降伏のため、(5) 神前法楽のため、ということとされます。この願文の場合、(1)と(5)が当てはまるでしょうか。(5)は、神仏習合の考えにより、神を仏教の守護者とみなされ、その神への報恩と威光の増大が目的だったとされます。

正応四年(一二九一)本『金剛峯寺年中行事帳』(延宝五年(一六七七)写)によると、この時期には、御社で年中行事として毎月朔日に大般若経の転読が行われていました。江戸時代末に編纂された『紀伊統風土記』の「歳時記」にも同様に記され、満山静謐(高野山の安泰)、天下安全のために年中行事として行われていたようです。少なくとも十三世紀から江戸時代末まで行われていたことがわかります。

願文にある大般若経転読が、毎月朔日の転読と関わりがあるかは不明ですが、御社の大般若経転読が高野山上で長く続けられ、天下泰平や高野山の安泰を祈願していたことがわかります。この願文は、御社の高野山の鎮守社としての役割がわかる貴重な史料だと言えるでしょう。

(研谷)

(書き下し文) 敬白

大願を立て奉る事

- 一、御影堂に精進供を備進し奉るべし。
 - 一、奥院に理趣三昧を修し奉るべし。精進供を備進すべし。
 - 一、御社に一日大般若経を転読し奉るべし。精進供を備進すべし。
 - 一、天野宮に一切経会を興行すべし。
 - 一、同宮に一日大般若経を転読すべし。宮神楽を勤仕すべし。
- 右、聖跡安穩、人法泰平の為、殊に精誠を致し、大願を立て奉ること件の如し。

仁治三年(一二四二)七月十三日 寺僧等白

納骨信仰の展開 ③

公益財団法人 元興寺文化財研究所

狭川 真一

今回は、昭和三九年（一九六四）から工事が始まった、奥之院灯籠堂改築工事の折の記録を紐解いてみましょう。この成果も前回と同じく『高野山奥之院の地寶』（以下『地寶』という）という本に掲載されている情報を整理したものです。

工事中の発見とはいえ、貴重な納骨器が多数確認されています。今回はその中でも小型の容器に注目してみます。

遺骨を高野山へ納める

『平家物語』巻第三「僧都死去」には「有王は俊寛僧都の遺骨を頸にかけ、高野へのほり、奥院に納めつゝ、蓮華谷にて法師になり、諸国七道修行して、しう（主）の後世をぞとぶらいける」とあって、弟子の有王が鬼界ヶ島で死んだ俊寛僧都を火葬したのち、遺骨が入った壺を頸にかけて高野山に登り、奥之院に納骨したことがわかります。同じことは



俊寛の遺骨を抱いて高野山へ登る弟子の有王（画：狭川無量）

ざわざ頸にかけているのですから、前回までに紹介したような花瓶サイズの

小型化が進む納骨容器

れでも一人分の遺骨すべてが納められたとは考えられず、一部分にとどまっていたと思われます。

ものだと思われま。これまで紹介しました平安時代後期から鎌倉時代にかけて御廟付近に埋納された納骨器は、花瓶くらの大きな壺類が

灯籠堂建設地で発見された納骨器にはこれらとはサイズが大きく異なる、かなり小さな容器類がたくさん出土しています。書道の水滴くらいの大きさのものが多く、掌の中に納まってしまいうくらいです。これでは、骨はごく一部しか入りません。火葬することで骨は小さく、脆くなりますが、それでもこのサイズの壺に入るのには、指先などの小骨か、破片化した骨の一部分だったとみられます。

『高野春秋編年輯録』治承三年（一一七九）夏五月の記事にも見えていますので、その年代が判明します。おそらくこの俊寛の納骨器は、わ

ほとんどですので、おそらく俊寛の遺骨と同様に、関係者が大切に高野山へ運んできたものと思われる。しかし容器の大きさを考えると、こ

このことから、納骨にあたって骨のごく一部でも奥之院に納めれば、極楽往生できると考えられたことがわかるとともに、小型ゆえに一人の人（僧侶）が複数の納骨器を携えて、高野山まで登ってくることも可能になるわけです。こうした小型の納骨

器は、十三世紀中頃（鎌倉時代中頃）から増加し始めます。奥之院への納骨が始まって五十年ほどが経過した頃です。

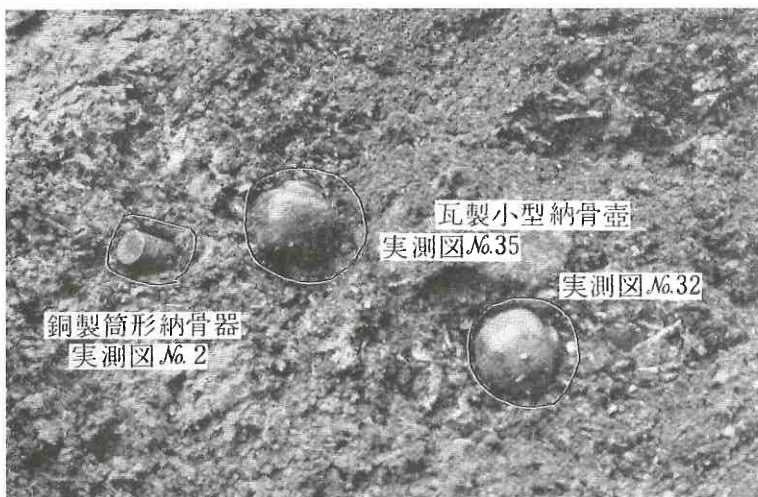
さらに小型容器の産地をみると、瀬戸窯などの国産品が多くみられます。当時の陶器の流通を知ることができるのですが、素焼きの土器（土師器）やそれを焼した瓦器と呼ばれる黒灰色の小壺などもあり、大型の壺は白磁や青磁など輸入陶磁器が多かったのに対して、国産陶器や地元で焼いた日用品的なものが多いこと



大小ある納骨器（第二灯籠堂地点出土）

に注意すべきです。このことは、社会の支配階層を中心に行われていた高野山への納骨が、地方へ拡散するとともに、階層的には少し広がって低層化したのだろうと思われれます。

しかし、小型化したのは壺だけではなく金属製の筒型容器などもありますので、高野山の納骨信仰の在り方自体が小型の容器へ移行しているとともに、階層的には幅が広がったと考えてよいでしょう。この現象は、勧進僧（高野聖）が各地で活動していることを彷彿とさせるものだ



小型の納骨器出土状況（骨層に混じって出土／『地實』より）

どこに祀られていたのでしょうか。今は御廟の西隅に納骨堂があり、そこへ納められています。独立した納骨堂としての記録は室町時代末期までしか遡りません。しかし、鎌倉時代にはすでに御廟付近に納骨するようになっていたことが分かります。よく、古くからこの近くに存在しても不思議ではありません。

そこで掘削時の写真を見ますと、大量に整理された骨の層の中に混じって小型の納骨器が写っています。この層は徐々に堆積したもので

と思われる。諸国を巡り、いろいろな階層の人々から遺骨を預かり、奥之院へ届ける。そうした姿が浮かんでくるのです。

遺骨は奥之院のどこに納めたか

さて、小型の容器に納められた遺骨は、奥之院の

ではなく、どこかに納められていたものが、何らかの理由で一気に整理されたものと考えられます。しかも、御廟付近や少し離れた第二灯籠堂の調査では小型の納骨器の出土は少なく、灯籠堂の地下から出土したものが最も多いのです。

この状況から遺骨を入れた小型の納骨器は、灯籠堂の中に納められていたと考えるのが最も素直です。灯籠堂は当時、拝殿と呼ばれていて、弘法大師の御廟にお参りするための建物だったので、承久三年（一二二二）からはそこでお舎利の供養を行うようになります（『奥院興廃記』）。実は、奈良の法隆寺舎利殿にも中世頃から納骨の行われていたことが分かっています。お舎利と聖徳太子、お舎利と弘法大師。お二人とも日本の仏教の発展に大きく貢献された偉人です。大師のお力で往生したい、そんな想いが奥之院拝殿への納骨を促進させたのではないかと考えています。そして、時間の経過とともに大量に納められた納骨器や遺骨は、拝殿の建て替え時などに地下へ整理、埋納されたのではないのでしょうか。

【参考文献】

巽三郎ほか 一九七〇『高野山奥之院の地實』和歌山県教育委員会、高野山文化財保存会

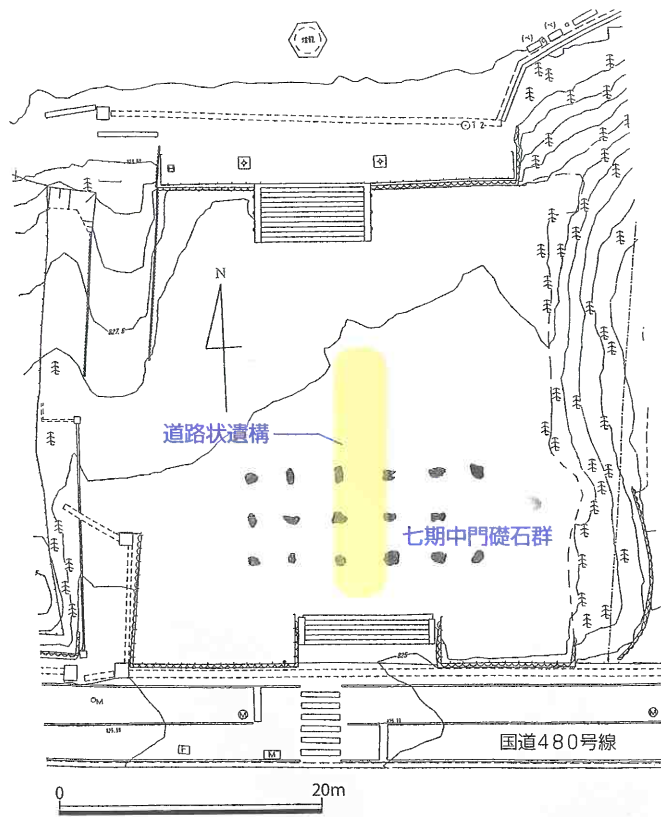


図1 道路状遺構検出位置図（復元部分を含む）



写真1 道路状遺構（北から）

考古学から高野山の伽藍「中門」を考える（その四）

平安時代の道路状遺構から

文政三年（一八二〇）、七期中門が再建されました。発掘調査では、中門の礎石群の下層、現地表面下から約〇・八メートルの深さで、中門の中心を南北に通る抜ける、九世紀末から一世紀後半にかけての道路状遺構が検出されました。（図1・写真1）

道と言えは、「高野七口」と言われるように、高野山は周辺の地域と「中辺路」、「小辺路」、「高野街道（京大坂道）」、「高野山町石道」などの道と繋がっています。その内の一つ、「高野山町石道」は、空海が高野山を開創した頃（九世紀初頭）、空海のお母さんの玉依御前がお住まいになった高野山麓にある慈尊院（和歌山県九度山町）と高野山を繋ぐ道として整備されま



図2 高野山町石道参詣風景『紀伊國名所圖會』



写真2 国史跡高野山町石

した。

当初、町石道の沿道には一八〇基の木製卒塔婆が建立されていたと考えられており、文永二年（一二六五）に陸奥守足立泰盛が発願し、その建立の勧進に寛敷が携わり、木製から石製のものに改められました。

現在、我々が目にする石製の町石が立ち並ぶ高野山町石道の風景は、町石建立発願後二十年の歳月を経て、弘安八年（一二八五）に完成したもので、建立当時の佇まいを伝えています（写真2）。

慈尊院と高野山とを結ぶ距離は、一八〇町（約二三km）の道程があり、その沿道には一里毎に里石が四基、そして一八〇基の町石が一丁（約一〇九m）毎に建てられています。

しかし、実際には同じ所に同じ町石名が複数あります。これは、時の経過と共に、町石が土砂に埋もれ、また土砂崩れなどで谷に転落し失われたものを、大正、昭和期に後補で再建したものです。ですが、その後当初の町石が発見され、同じ場所に新旧の町石が建てられたためです。

また、一八〇基の町石は、「胎藏界曼荼羅」の一八〇尊の仏像を表し、形状は五輪塔の形で、「梵字」（サンクリット文字）、「施主名」、「願意」、「建立年月日」が刻まれています。

石材は、主に花崗岩、いわゆる御影石（兵庫県神戸市御影産）で、一部香川県小豆島産のものも使用されていることが最近の石造物研究で判明しております。また、町石の建立には多くの石材が必要となるため、現在の神戸市御影にある御影石の石切場が開発されたとする大変興味深い説もあります。

仮にそうだとすると、今日私たちの生活の中で、墓石、供養塔、石敷きなど、様々な場所をよく目にする御影石は、町石道の開発のお陰で、その恩恵にあやかっていることとなります。

話は戻りますが、町石に刻まれている「梵字」は、すなわち「仏」そのものです。したがって、町石道の通り方は、往古より慈尊院から高野山にいたる道中の町石を一基づつ礼拝しながら、足取りを進めました。そして、高野山に到着すると、まず「大門」を潜り、山上の六町石から一町石までを礼拝し、次に伽藍の「中門」を潜り、「金堂」などの伽藍の諸堂塔、またその他の諸堂塔などを参拝します。

今回検出された道路状遺構は、九世紀末から十世紀初頭には既に設けられており、十一世紀後半頃には道の両側に側溝を設け、さらに路面を

丁寧に衝き固めて修復されたことが確認されました。

この検出状況を高野山の歴史と照らし合わせると、道路状遺構は空海入定後には存在しており、その後の十一世紀には上皇や公家ら平安貴族による高野詣が盛んとなり（図2）、町石道の往来が頻繁であるため道が整備された可能性が高いものと考えられます。

この頃の様子を窺うものとして、『寛治二年白河上皇高野御幸記』があります。この史料には、寛治二年（一〇八八）、白河上皇が高野山に御幸されたことが記されています。

白河上皇の御幸された時期の中門は、二期中門（承和十四年（八四七）建立、永久三年（一一一五）焼失）が存在した時期です。その位置は金堂の南側で、今回発掘した場所より一段高い場所にあつたことが考えられますが、調査対象外地のため確認出来ませんでした。

ですが、町石道の巡礼経路からすると、白河上皇も自らの足で、検出された道路状遺構をお通りになり、（二期）中門を潜り、伽藍参拝をなされたことが考えられます。

（鳥羽）

高野山開創1200年記念展

「初公開！高野山の御神宝」— 壇上伽藍御社の奉納品 —

期間 平成27年 3月21日(土)～7月5日(日)

前期：3月21日(土)～5月21日(木)

後期：5月30日(土)～7月5日(日)

神秘の扉がいま、開かれる

高野山の壇上伽藍御社に、地主神として祀られる丹生・高野両明神。高野山の開創に深く関わる両明神の御神宝を一挙初公開し、御社信仰の歴史に迫ります。

主な出陳品

■ 絵画

- 重文 惠果阿闍梨像 西生院 前期
- 重文 弘法大師・丹生高野両明神像(問答講本尊) 金剛峯寺 前期
- 重文 狩場明神像 金剛峯寺 前期
- 重文 丹生明神像 金剛峯寺 前期
- 重文 影向明神像 宝寿院
- 重文 稚児大師像 清浄心院
- 重文 弘法大師像(瑜祇大師) 竜光院
- 重文 日輪大師像 三宝院
- 山王院本殿縮図(壇上御社并総社十分一絵図) 金剛峯寺

■ 工芸

- 大日如来懸仏 金剛峯寺
- 大型懸仏(阿字・鏤字・大日如来) 金剛峯寺
- 梵字懸仏 金剛峯寺
- 大日如来鏡像 金剛峯寺
- 十一面千手観音菩薩鏡像 金剛峯寺
- 円形華鬘形荘嚴具 金剛峯寺
- 華鬘 宝寿院
- 銚 銘 国次(二之宮奉納) 金剛峯寺
- 太刀 銘 高野鎮守丹生大明神 国次作 金剛峯寺
- かつらぎ町指定 丹生都比売神社 ※
- 太刀 銘 高野鎮守丹生大明神 国次作 ※4月中旬～下旬は祭祀使用のため一時返却

■ 書跡

- 国宝 御室御所高野山御参籠日記(又続宝簡集) 金剛峯寺 前期
- 国宝 金剛峯寺衆徒言上状案(又続宝簡集) 金剛峯寺 後期
- 国宝 両明神表白(続宝簡集) 金剛峯寺 後期
- 重文 高野大師行状図画 卷四 地藏院 前期
- 重文 白河上皇高野御幸記 西南院 前期
- 山王院大般若経法則 金剛峯寺 後期



梵字懸仏



大日如来懸仏

開創法会期間限定特別公開

「高野山三大秘宝と快慶作孔雀明王像」

期間 平成27年4月2日(木)～5月21日(木)



国宝 聳聲指帰

弘法大師空海の真跡「聳聲指帰」、大師が唐から投げ、高野山に飛来したという伝承を持つ「飛行三鈷杵」、大師が唐から請来した「諸尊仏龕」の高野山三大秘宝、さらには快慶作の孔雀明王像を、期間限定で特別公開いたします。運慶作の八大童子像も併せて展示。

※五月二日(土) 午前10時 霊宝館本館紫雲殿にて八大童子像法楽法会

主な出陳品

彫刻

- 国宝 八大童子像(運慶作) 金剛峯寺
- 重文 孔雀明王像(快慶作) 金剛峯寺
- 重文 執金剛神立像(快慶作) 金剛峯寺
- 重文 四天王立像(快慶作) 金剛峯寺

工芸

- 国宝 諸尊仏龕 金剛峯寺
- 重文 金銅三鈷杵(飛行三鈷杵) 金剛峯寺

書跡

- 国宝 聳聲指帰 金剛峯寺

高野山霊宝館からのお知らせ

建造物特別公開

高野山開創千二百年記念事業として、次記の期間に建造物特別公開をいたします。

〔重要文化財・徳川家霊台〕

徳川家霊台内部特別公開です。(ただし内部には入れません)

〔日程〕

《春》平成27年5月9日(土)～5月17日(日)

《秋》平成27年10月31日(土)～11月8日(日)

〔公開時間〕午前9時～午後4時30分

〔場所〕徳川家霊台(家康霊屋・秀忠霊屋)

〔拝観料〕200円(通常拝観料)



重要文化財・徳川家霊台(家康廟)

〔国宝・不動堂〕

不動堂内部特別公開です。(ただし内部には入れません)

〔日程〕平成27年8月28日(金)～8月30日(日)

〔公開時間〕午前9時～午後4時30分

〔場所〕国宝・不動堂(大伽藍)

〔拝観料〕無料(事前申込不要)

お問い合わせ先 高野山霊宝館 TEL 0736-56-2029(代)

霊宝館の庭園

イイギリ・飯桐・山桐・なんてんぎり

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

イイギリは、イイギリ科・イイギリ属の落葉高木です。イイギリ属の樹種は、わが国を含む東アジアに自生する、この一種だそうです。

イイギリという和名のイイは、この樹の葉で飯を包む(包んだ)ことによるというのが定説になっていますが、果実の中に詰まっている多数の小さな粒状の種子を米に見立てて



落葉後の果実の房



幹と葉

のことでは、と説く人達も。ギリ(キ

り)は、葉と花が、高野山真言宗の宗紋と金剛峯寺の寺紋(桐と巴)にもなっている、中国原産とされているゴマノハグサ科の落葉高木・キリ(桐)をさします。

この樹の各地の方言名にも、いぬぎり(犬桐)、うねぎり(歎桐)、かたぎり(堅桐)、たにぎり(溪桐)、のぎり(野桐)、やまぎり(山桐)などがあり、このうちでも、やまぎり(山桐)とよんでいる地方が多い

きり(キリ)と呼ばれ、桐と書かれる理由は、葉や幹の外観の相似性や幹材の利用(用途)などにあると思われま

す。幹材は柔らかくて軽いので、下駄材、各種箱材、器具材などに用いられ、桐材の代用材としても使われたといえます。「紀伊植物誌1」には「里人は、やまぎりともいい、下駄材とする。桐よりもちがよい」とあり、桐下駄より長持ちするという

ことでしょうか。

高野山塊では山麓部から山頂部の小谷ぞいの人工林の切れ間、小尾根の崖、山道や道路ぞいの斜面の二次林内などに自生しています

す。

花坂の矢立という在所から大門に至る、この度、改修されている高野山への幹線道路・国道四八〇号線ぞいには個体数も多く、バスの車窓からでも容易に見(観)られるものもあります。

秋、緑の葉の、長い葉柄が赤みを帯びはじめる頃から、枝先に朱赤色の球形の果実が房状についているのが目立つようになります。その容態が、メギ科のナンテン(南天)に似ているというので、ナンテンギリという別名、なんてんぎり、という方言名があります。

初冬、葉が黄葉し、葉柄は淡い赤色を残して落葉する頃には、果実は橙赤色となり、冬の間、氷雨にうたれ、寒風にさらされ、雪をかむり、黄赤色、淡い黄赤色へと、色を変えながらも、春、三月初頭頃までずっと、枝に垂れ下がり、人目をひきま

す。昭和の初期に発刊された、牧野富太郎博士の名著「日本植物圖譜」には、このイイギリについて、「果実ハ球粒、房ヲナシテ垂レ、晩秋熟シテ美シキ朱赤色トナリ南天ニ似ル、久シク梢頭ニ残リテ人目ヲ惹ク」と、あります。